

鞏県石窟寺にみる音楽図像

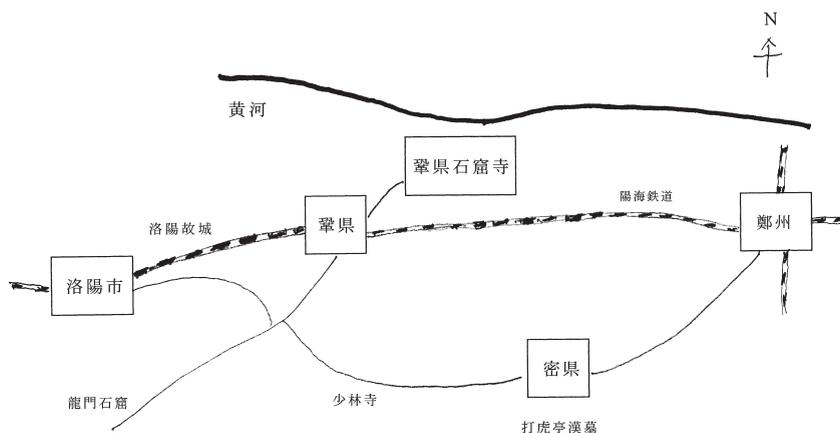
樋口 昭
蒲生 郷 昭

はじめに

かすかな光の差し込む石窟のなかに、楽を奏でる飛天や伎楽天あるいは楽人たちの姿がある。かれらの楽は、忘れられた石窟のなかで、深い眠りに落ちていた。この石窟の眠る楽に新たな光を当てて呼び覚まし、再度、楽に生命を与えようと試みた。本稿で光を当てようとする楽は、鞏県石窟寺に眠る楽である。眠る楽は、伎楽天によって奏される。

楽器を手に音楽を奏でる像を伎楽天⁽¹⁾とよぶことが通常である。本稿でもこのような音楽を奏する像を伎楽天とよぶことにする。

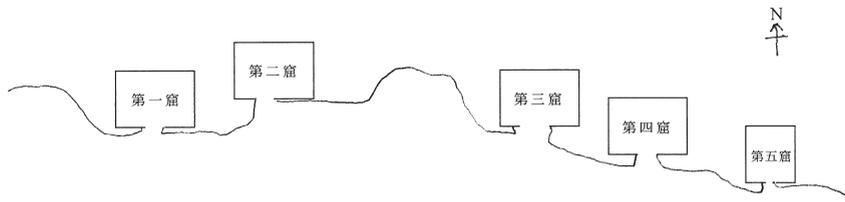
河南省洛陽市の洛陽故城から東へおよそ40キロの鞏県には、五つの石窟を中心とする鞏県石窟寺がある。この鞏県石窟寺のほか、洛陽市周辺には龍門石窟があり、鞏県石窟寺は、龍門石窟の蔭に隠れてしまったような存在である。



鞏県石窟寺付近図

鞏県石窟寺には、五つの石窟のほかに三尊摩崖大像、千仏龕および328の歴代の造像龕が現存する(河南省文物研究所 1983 194)。鞏県石窟寺、龍門石窟、さらに雲岡石窟は、北魏一代の帝室が国家の力を尽くして開いた石窟である(河南省文物研究所 1983 187)という。

鞏県石窟寺の五つの石窟のうち、三つの石窟で伎楽天の楽をみることができる。第一窟、



鞏県石窟寺石窟配置図

第三窟、第四窟の壁面の下部である。これらの石窟において伎楽天が奏でる諸楽器について、楽器の種類から音楽へとその意義を考えたいと思う。

1. 伎楽天が奏する諸楽器

第一窟は、五つ並ぶ石窟の西端に位置して、520年頃の造営とされる（八木 2004 117）。この石窟は、他の石窟も同様だが、南が出入り口となり、窟の中央に中心塔柱がある中心塔柱窟形式（八木 2004 121）である。石窟や中心塔柱の壁は石壁で、壁の全面、天井に仏や天、文様などが彫られている⁽²⁾。



鞏県石窟寺 第一窟前

(1) 第一窟

伎楽天は、壁面の下部に横に並び、楽を奏している。その並びは、図1の通り東壁、南壁東側、西壁であり、北壁には、伎楽天は見いだせない。この窟は、かなり多数の楽器を奏す

鞏県石窟寺にみる音楽図像

る伎楽天のレリーフが造られたと思われる。東壁、西壁に各12体、南壁東側に5体（西側は確認できない）造られたことは確認できる。しかし、楽器名まで確認できる伎楽天は、東壁に4体、西壁に7体、南壁東側に4体である。

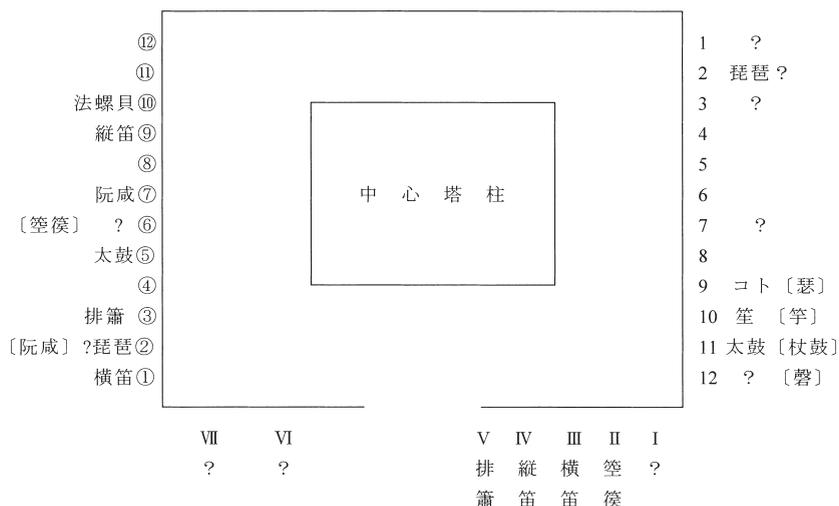


図1 第一窟：伎楽天の楽器配置

[] の楽器名は、《中国音楽文物大系》總編輯部 1996における名称である。図2、3、4においても同様である。

第一窟において確認可能な楽器の種類は、つぎの通りである。

- 体鳴楽器 なし
- 膜鳴楽器 太鼓 2
- 弦鳴楽器 コト 1 琵琶 2 阮咸 1 箜篌 1
- 気鳴楽器 横笛 2 縦笛 2 排簫 2 笙 1 法螺貝 1

楽器の種類はここに示した通り、10種類である。

(2) 第三窟

第二窟は、未完の窟であり、音楽的資料は見いだせない。隣の第三窟では、北壁を除いて東壁に6体、南壁東側に1体、同じく西側に2体、西壁に7体、合わせて16体の伎楽天が楽器を奏する。各伎楽天の配置は、次頁にある図2の通りである。

第三窟において、第一窟同様に、確認可能な楽器をあげる。

- 体鳴楽器 なし
- 膜鳴楽器 太鼓 2 腰鼓 2
- 弦鳴楽器 コト 2 琵琶 1 阮咸 1 箜篌 1
- 気鳴楽器 横笛 1 縦笛 1 排簫 2 笙 1 法螺貝 1

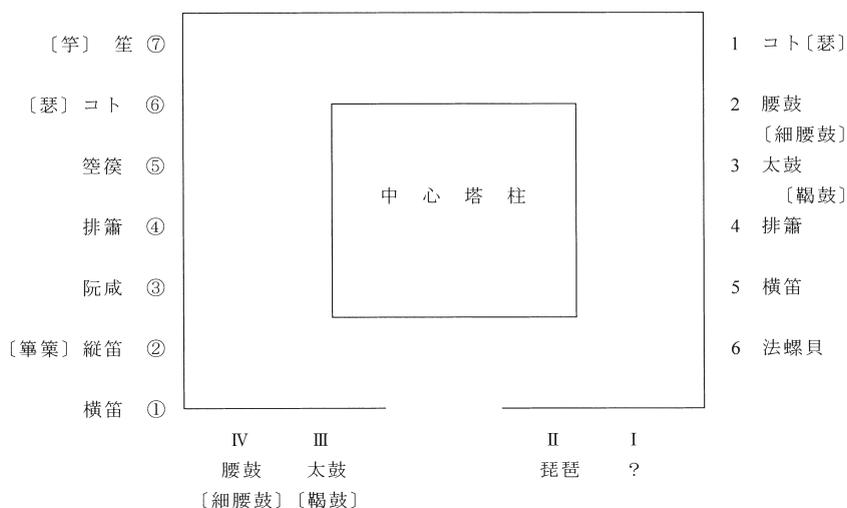


図2 第三窟：伎楽天の楽器配置

楽器の種類は、第一窟よりも鼓が増えて11種類となる。この窟の伎楽天は、損傷も少なく、ほぼ確認可能であった。

(3) 第四窟

この窟は、第一、第三窟とは異なり、北壁においても伎楽天が楽器を奏でる。東壁には、伎楽天の姿はなく、西壁で、第一、三窟と同様に伎楽天が楽器を奏する。その数は、北壁9体 (viは除く)、西壁 (①を除く) 7体の16体である。

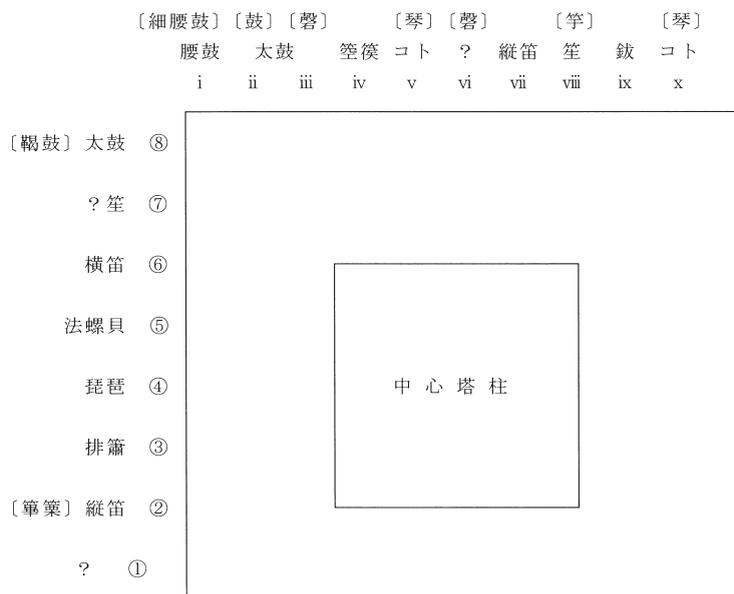


図3 第四窟：伎楽天の楽器配置

第四窟における楽器は、つぎの通りである。

体鳴楽器	鈸	1
膜鳴楽器	太鼓	2 腰鼓 1
弦鳴楽器	コト	2 琵琶 1 箏篋 1
気鳴楽器	横笛	2 縦笛 2 排簫 1 笙 2 法螺貝 1

楽器の種類は、第一、三窟にはみられなかった体鳴楽器の鈸が演奏されていた。また、1個の太鼓を立てて、上の膜面をふたりで演奏する伎楽天の姿もある。

これら三つの窟で奏される楽器をまとめておく。なお楽器の名称は、通常、日本において用いられる名称で記した。ここでは名称の細部まで検討せず、縦に吹いている気鳴楽器は縦笛、横吹き気鳴楽器は、横笛とのみ記した。太鼓の場合も同様である。しかし、胴の括れた太鼓は、腰鼓と表記した。笙の場合もサイズの上から、竽である可能性もある。図1、2、3のなかで、伎楽天の存在は、確認できるが、楽器を奏しているか、他の行為を行っているか判断不可能な場合は、?を付けた⁽³⁾。

体鳴楽器	鈸
膜鳴楽器	太鼓 腰鼓
弦鳴楽器	コト 琵琶 阮咸 箏篋
気鳴楽器	横笛 縦笛 排簫 笙 法螺貝

これらの石窟で伎楽天が奏でる楽器として確認できた楽器は、12種類である。第一窟の東壁では、さらに8体の伎楽天が、西壁では5体が楽器を奏していたことであろうし、第一窟南壁西側にもその可能性はあるが、不明である。

2. 各楽器の形態

伎楽天が奏する楽器の詳細について知ることは不可能である。しかし、レリーフに映し出された演奏する姿から、ある程度の楽器に関するデータを得ることができるのではないか。各楽器について図像を比較しつつ検討してみたい⁽⁴⁾。

(1) 太鼓

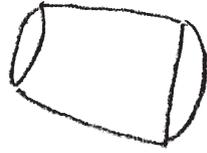
太鼓は、各石窟につきのように各々二つずつ見いだせる。

第一窟	a 東壁 11 (河南省文化局文物工作隊編 1963 43図)
	b 西壁 ⑤ (河南省文化局文物工作隊編 1963 59図)
第三窟	c 東壁 3 (河南省文化局文物工作隊編 1963 124図)
	d 南壁西側 III (河南省文化局文物工作隊編 1963 119図)

第四窟 e 西壁 ⑧ (河南省文化局文物工作隊編 1963 239図)

f 北壁 ii (河南省文化局文物工作隊編 1963 246図)

各楽器にアルファベットを付けて、以下このアルファベットでよぶことにする。太鼓は、胴の形態、皮の張り方、桴の有無を中心にみていくことにしたい。

	胴の形態	皮の張り方	桴の使用	特記事項
a	多少膨らむ	不明	2本	[杖鼓]
b	中央膨らむ	不明	なし	
c	多少膨らむ	不明	なし	[鞞鼓]
d	皮面左大	不明	なし	 [鞞鼓]
e	皮面左大	不明	なし	[鞞鼓]
f	中央膨らむ	不明	各々2本ずつ	太鼓は一方の面を下にして立てて、ふたりの打ち手の間に置く。ふたりは、各々両手に桴を持つ。 [鼓]

[] のなかの名称は、《中国音楽文物大系》總編輯部 1996における名称である。

図4 太鼓の形態

太鼓の胴の形態は、中央の膨らむビヤ樽型と、胴が奏者の左側で膨らみ左側の皮面が大きくなる(皮面左大)のふたつの形に彫り分けられている。bの太鼓には、胴の周囲を2本のたがのような物で巻いている。bは、かなり太鼓の構造が分かるようにできている。皮を胴に直接張ったのではないかとも考えられる。注目される演奏法は、fである。ひとつの太鼓をふたりの間に置いて、それぞれ2本の桴で打つ⁽⁶⁾。aとfは桴を用いるが、他は手で直接打つようである。aは、両手に桴を持つ。gは、打ち手の左手側に膨らむ胴に、両面皮が張られる。皮は、直接太鼓の胴に張り付けられたように見え、皮の端に沿って、丸い輪が付けられる。この輪で皮を固定したとも考えられる。

このようにみると彫られた太鼓を打つ姿は、太鼓の形態、桴の有無によって、つぎの5種となる。

- | | | |
|-----|---------|--------------|
| b | 両手で打つ | 中央の膨らむ両面太鼓 |
| c | 両手で打つ | 多少膨らみのある両面太鼓 |
| d、e | 両手で打つ | 一方に膨らむ両面太鼓 |
| a | 両手に桴を持つ | 多少膨らみのある両面太鼓 |

f 両手に桴を持つ 中央の膨らむ両面太鼓
1 個の太鼓をふたりに打つ

(2) 腰鼓 (胴に括れのある両面太鼓)

胴に括れのある太鼓を今日の日本では一般に鼓とよぶが、この形態の太鼓は、新疆ウイグル自治区のキジル千仏洞などにも描かれ、多くの場合腰に付けて演奏されるので、腰鼓といわれている。この腰鼓は、

第三窟 g 東壁 2 (河南省文化局文物工作隊編 1963 123図)

h 南壁西側 IV (河南省文化局文物工作隊編 1963 120図)

第四窟 i 北壁 i (河南省文化局文物工作隊編 1963 245図)

にみることができる。

演奏する姿からみて、第三窟の g と h は、両者とも左を下げて楽器を腰に付け、両手で打っている。楽器の括れる線は、直線的であり、h では、楽器の両端に細い線が確認でき、皮の張り方が推察できる。楽器のかまえ方で i は、g, h より縦になるようにかまえる。括れへ向かう胴の線も緩やかなカーブで、g と h との形態の違いが判明する。三者に共通する現象は、胴の中心、括れて細くなった箇所、線が表されていることである。この楽器の顕著な特徴は、胴のもっとも細い部分に巻かれる線 (実際の楽器では、輪となる) である。これが彫られていることは、この種の太鼓の特色を捉えているといえることができる。この中心の輪は、胴に括れのある今日の日本の三鼓、大鼓まで継承されている。

(3) コト

東アジアに伝承される細長い板の面に平行に弦を張る弦鳴楽器を総称して、日本ではコトとよぶ。本稿では、この日本の名称を用いたが、《中国音楽文物大系》總編輯部1996では、琴と瑟とに区別している。鞏県石窟寺において、伎楽天が奏でるコトは、つぎの五面であった。

第一窟 j 東壁 9 (河南省文化局文物工作隊編 1963 42図)

第三窟 k 東壁 1 (河南省文化局文物工作隊編 1963 122図)

l 西壁 ⑥ (河南省文化局文物工作隊編 1963 136図)

第四窟 m 北壁 v (河南省文化局文物工作隊編 1963 248図)

n 北壁 x (河南省文化局文物工作隊編 1963 253図)

コトを弾く伎楽天は、5 体とも脚の組み方に相違があるが、コトを脚の上ののせるかまえ方である。5 体とも右手は手前に、左手は弦を押さえて、右手で弾くようなポーズをとっている。楽器を左へ下げることが共通である。コトは、単に棒状に表現されるのみであるので、柱(ブリッジ)、弦数などは不明である。m は、右手の指の位置や左手の押さえ方から、演奏しているような実感を与える。なお、《中国音楽文物大系》總編輯部1996では、m と n を琴、

その他を瑟とする。

(4) 琵琶

琵琶は、形の美しさからシルクロードを巡る楽器の代表として、東アジアを制覇したのではないか。多くの石窟にこの姿が今日まで留められてきた。鞏県石窟寺の琵琶は、当初から4弦の琵琶であり、五弦琵琶は描かれていない。

琵琶は4面が確認できた。

- 第一窟 o 東壁 2 (河南省文化局文物工作隊編 1963 41図)
 西壁 ② (河南省文化局文物工作隊編 1963 実測図7頁)
- 第三窟 南壁東側 II (河南省文化局文物工作隊編 1963 113図)
- 第四窟 p 西壁 ④ (河南省文化局文物工作隊編 1963 235図)

琵琶はいずれも破損がひどく、ほぼ形を留める琵琶はpのみである。この琵琶を伎楽天は、右手で撥を握り、左に下げる棹上の柱(フレット)を左手で押さえるポーズをとっている。琵琶には、弦、柱などは描かれておらず、棹の先端部も失われている。だが、右手で握りしめる撥から、この時代には、この形の撥を用いて演奏したことを暗示させる。撥は細長い棒といった感じである。

oは、損傷が激しく、胴の一部が確認できるのみだが、撥がはっきりと表されている。先が多少広がる撥を上向きにかまえるポーズで、これはpも同様である。この撥の持ち方で演奏が可能であるのか疑問であるが、撥の形は、pとちがって今日の楽琵琶の撥に近い。楽器のかまえ方では、oは棹を水平にするが、pは棹を下げる。他の地域の壁画では、五弦琵琶が棹を下げたかまえ方で描かれる。

(5) 阮咸

中原に起原を持つとされる丸い胴に長い棹の阮咸は、

- 第一窟 q 西壁 ⑦ (河南省文化局文物工作隊編 1963 61図)
- 第三窟 r 西壁 ③ (河南省文化局文物工作隊編 1963 134図)
- 第四窟 なし

の二つが現存する。ともに損傷が少なく、楽器の形態をみることができる。丸い胴と長い棹というこの楽器の特徴は十分表現されるが、棹の先端部の糸巻きなどは琵琶同様無視されている。撥は両者とも長い板状の形で表されており、琵琶の撥より長い。qの撥は、先端に向かって広がりがあり、より現実的描写のようにみえる。楽器のかまえ方は、qが上向き、rは下向きである。棹が太く、この点が気にかかるところである。

(6) 箏篋

琵琶と並ぶシルクロードの楽器である箏篋を鞏県石窟寺では、

第一窟 南壁東側 II (河南省文化局文物工作隊編 1963 23図)

第三窟 西壁 ⑤ (河南省文化局文物工作隊編 1963 136図)

第四窟 北壁 iv (河南省文化局文物工作隊編 1963 247図)

にみることができる。形態はすべて竪箏篋であり、弓形ハープや宝珠箏篋ではない。いずれも立て膝をしてその上に楽器をかまえる。弦を弾く手は奏者の手前が右で、左手は先へ延ばす。奏者の頭の高さまで延びる湾曲した胴、横に延びる横木と弦を弾く手の形は、いずれも共通する表現の方法である。ここでは、弦数の確認は不可能である。

(7) 横笛

長い棒状の物を口に当てている姿が横笛の演奏スタイルである。つぎの五つの姿がある。

第一窟 s 南壁東側 III (河南省文化局文物工作隊編 1963 23図)

t 西側 ① (河南省文化局文物工作隊編 1963 57図)

第三窟 u 東壁 5 (河南省文化局文物工作隊編 1963 126図)

v 西壁 ① (河南省文化局文物工作隊編 1963 132図)

第四窟 w 西壁 ⑥ (河南省文化局文物工作隊編 1963 237図)

横笛を左右どちらにかまえても演奏は可能であるから、奏法上問題はないかもしれないが、左右2通りのかまえ方が描かれる。

今日と同じ右にかまえる姿 t

左向きにかまえる姿 s u v w

五つの像のなかで、右にかまえる像は1体のみ、他は左向きにかまえる。工人は、左右のいずれかであることを意識して作成したに違いない。wの演奏する姿をみると、歌口にふれる唇と息を含んだ顔の表情が、吹いているという実感を描き出す。このことから、かなり正確に演奏を像に写そうとしたのではないかと感じる。今日でも、民俗レベルの演奏を聴くと、時折左向きにかまえて横笛を吹く姿に遭遇する。横笛は、左右いずれに向けて吹いても問題はないということである。

鞏県石窟寺における横笛演奏の姿は、左向きにかまえる像が多い。横笛は棒状に表現されるのみで、指孔は確認できない。笛をかまえる手は、右向きの場合は手前に左手がきており、左向きの場合は逆になり、みる人に不自然さを感じさせない。指孔を押さえるさいの指の形も正確で、手前の指は楽器の外側から、先の手は、内側からと正確に描かれる。しかし、押さえる指孔は確定できない。

(8) 縦笛

縦笛は、歌口を持つ縦笛と複簧を付ける縦笛とが、意識的に描き分けられている。縦笛は、

- | | | |
|-----|----------|--------------------------|
| 第一窟 | 南壁東側 IV | (河南省文化局文物工作隊編 1963 17図) |
| | 西壁 ⑨ | (河南省文化局文物工作隊編 1963 62図) |
| 第三窟 | x 西壁 ② | (河南省文化局文物工作隊編 1963 133図) |
| 第四窟 | y 西壁 ② | (河南省文化局文物工作隊編 1963 233図) |
| | z 北壁 vii | (河南省文化局文物工作隊編 1963 250図) |

にみることができる。縦笛のかまえ方は、右手が演奏者の手前、左手を先方に出す。第一窟の2体は、破損しているので除くが、xとyは、笛の管が短く、また楽器を口に当てる箇所をみると楽器の先端が細くなり、その部分を唇でくわえている。つまり、管の先端に舌をはめているとみることができる。この形態は、ダブルリードの楽器であることを示す。これは、箏と同系統の楽器であることが示される。それに対して、zは管長が長く、楽器が体の近くにくるようにかまえる。これは、歌口のある縦笛の吹き方である。したがって、zは洞簫や尺八と同系統であるといえる。あきらかに、歌口を持つ縦笛と複簧をはめる縦笛を区別していることが分かる。

(9) 排簫

長さの異なる管を管長順に並べて組みたてる楽器であり、新疆ウイグル自治区の石窟にも多数描かれてきた。鞏県石窟寺では、

- | | | |
|-----|----------|--------------------------|
| 第一窟 | イ 南壁東側 V | (河南省文化局文物工作隊編 1963 17図) |
| | ロ 西壁 ③ | (河南省文化局文物工作隊編 1963 58図) |
| 第三窟 | ハ 東壁 4 | (河南省文化局文物工作隊編 1963 125図) |
| | ニ 西壁 ④ | (河南省文化局文物工作隊編 1963 135図) |
| 第四窟 | ホ 西壁 ③ | (河南省文化局文物工作隊編 1963 234図) |

にみることができる(排簫からは片仮名を記号として用いる)。

各管は、演奏者の左手に向かって管長が長くなるようにかまえている形が、イ、ロ、ニ、ホであり、ハのみ演奏者の右手に向かって管長が長くなる。複数の管を並べて固定するさいに、管のどちらから息を吹き込んでも音が鳴るように管の内側を削っておけば、ハのように吹いても演奏可能である。

排簫は、管数も確認できるように、各管が正確に描かれる。各楽器の管数はつぎの通りである。

イ 14管か ロ 13管 ハ 9管 ニ 10管 ホ 9管

排簫は、今日でも中国から東ヨーロッパまで広く演奏される。管数は様々で、壁画に描かれた排簫も管数は種々であった。破損や風化によって管数の確認は難しいことが多いが、鞏

県石窟寺の場合、排簫の管数を知ることは、不可能ではなかった。

(10) 笙

この楽器も新疆ウイグル自治区の石窟に多く描かれる。鞏県石窟寺では、

- 第一窟 へ東壁 10 (河南省文化局文物工作隊編 1963 42図)
- 第三窟 ト西壁 ⑦ (河南省文化局文物工作隊編 1963 136図)
- 第四窟 チ西窟 ⑦ (河南省文化局文物工作隊編 1963 238図)
- リ北壁 viii (河南省文化局文物工作隊編 1963 251図)

である。管は、あたかも筍のような形に表現され、瓢には長めの吹管が付く。他の石窟においても、笙は、筍形に描かれており、管数を描写しないことも多い。鞏県石窟寺の場合も、排簫に比べると描写があらう。チは、吹管らしき部分のみ残り、手の位置から笙と類推したが確定はしがたい。へととは、破損はなく、指の位置からみても不自然さは少ない。リは、伎楽天の大きさからみて、他の笙より大きくみえる。大きく表現されただけで、竿ではないであろう。吹管が長く、伎楽天は体を反らせ気味である。しかし、このような手の位置では、演奏は不可能である。これらの笙の形から、吹管が長いということのみ判明する。

(11) その他の楽器

第一窟 西壁⑩(河南省文化局文物工作隊編 1963 63図)、第三窟 東壁6(河南省文化局文物工作隊編 1963 127図)、第四窟 西壁⑤(河南省文化局文物工作隊編 1963 236図)で奏される楽器を法螺貝としたが、第一窟 西壁⑩は、指の押さえ方から、管が失われた笙の瓢の部分とも考えられる。第三窟 東壁6と第四窟 西壁⑤は、手が楽器を包むようにしており、法螺貝を吹いていると考えられる。

第四窟 北壁ix(河南省文化局文物工作隊編 1963 252図)の伎楽天は、鉞を打つ。奏者の手よりも大きめな鉞を斜めにかまえて打っている。鞏県石窟寺の楽器のなかでは、唯一の体鳴楽器である。

壁面の下部に彫られた伎楽天とは別に、第一窟中心塔柱西面の龕頂には、南側に琵琶を弾き、北側には横笛を吹く飛天が彫られている(河南省文物研究所編 1983 246、271)。この2体の飛天は、本稿でこれまで述べてきた伎楽天たちとは別で、西域にみる、楽器を奏でて空を舞う飛天と同質である。

3. 鞏県石窟寺の伎楽天と楽器

鞏県石窟寺で伎楽天が奏する楽器は、鉞、太鼓、鼓、コト、琵琶、阮咸、箏篋、横笛、縦笛、排簫、笙、法螺貝の12種類である。その彫り方は、演奏する伎楽天の表情まで表現する。

個々の楽器においても排簫のようにかなり実物の楽器に近く彫っていることから、その時代における楽器の形態を知るための資料となりうると考えられる。

石窟へ身を置くと、楽器を求めて窟の上部へ目を向けることが通常の行動であるが、鞏県石窟寺では、壁面の最下部へ目を向けることになる。最下部の壁面で伎楽天たちは、音楽を奏でている。そこには、伎楽天の他に畏獣像と神王像が彫られている。

西域とは異なる最下部での音楽演奏の場は、漢族化によるものであろうか。西域において、飛天や伎楽天は、浄土の樂を演奏していたが、鞏県石窟寺の石窟では、畏獣や神王と同様の位置に置かれたことになる。ここで奏される音楽は、鞏県石窟寺を造営した北魏一代の帝室のための音楽であり、演奏するのは、樂人でよいのであった。樂を奏する場、対象が異なることにより、音楽自体の性格も変化をみたであろう。その結果は、楽器にもあらわれており、その時代に用いられた漢族の楽器を壁に彫り込んだといえよう。現実の楽器であるから、工人は、各々の楽器の形態をかなり忠実に移すことも可能であったに違いない。鞏県石窟寺の石窟に彫られた諸楽器は、6世紀頃の音楽状況を知る資料となりえると考える。

注

- (1) 河南省文化局文物工作隊 1963 では、伎楽天を樂人と記す。
- (2) 各窟の中心塔柱と壁面の内容については、八木2004 122、135に詳しい。
- (3) 中国における名称は、《中国音楽文物大系》總編輯部 1996 にある。
- (4) 写真撮影が許可されないので、楽器の実態は、河南省文化局文物工作隊 1963、河南省文物研究所 1983 の写真などによる。
- (5) 1個の太鼓をふたりに打つと読んだが、再考の余地はありうる。今後検討したい。

文献

- 河南省文化局文物工作隊編 1963 『鞏縣石窟寺』 北京 文物出版社
久野健・杉山次郎（本文）石井久雄・渡辺俊文（写真）
1982 『龍門・鞏県石窟』 東京 六興出版
- 河南省文物研究所編 1983 『中国石窟 鞏県石窟寺』 東京 平凡社
《中国音楽文物大系》總編輯部編
1996 『中国音楽文物大系 河南卷』 鄭州 大象出版社
- 八木 春生 2004 『中国佛教美術と漢民族化—北魏時代後期を中心として』
京都 法藏館

鞏県石窟寺にみる音楽図像

本稿は、科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)「中国新疆ウイグル族におけるコンテクストの変化にもなう楽器文化の変容」(研究代表者 樋口昭)による調査の一環として、漢族の石窟調査を行った報告である。この調査は、2004年3月に行い、研究分担者の蒲生郷昭と樋口が調査に当たった。

Musical iconography at The Cave Temple of Gongxian

HIGUCHI Akira, GAMO Satoaki

At the Gongxian Prefecture in Henan province, China, during 6th century A.D., the cliff had hollowed out into The Cave Temple of Gongxian bracketed by music player figures carved out of the rock wall. In Cave I, III and IV, the music player decorated on the under side of the rock wall. They are respectively playing musical instruments counted twelve kinds such as followings:

Idiophone: Batsu

Membranophone: Taiko, Yohko

Chordophone: Koto, Biwa, Genkan, Kugo

Aerophone: Yokobue, Tatebue, Shoh, Haishoh, Horagai

These musical instruments were quite carefully carved out by sculptors. This enabled to know the musical instruments structures and how to play them in the 6th century. In the caves in western part of China, there are the flying apsaras carved out on the upper side of the rock wall. They look like dancing in heaven. On the way expressing flying figures. It expressed in the idea of heaven in Buddhism. However, the music players at The Cave Temple of Gongxian were carved on the lowest side on rock wall. The position transferred from upper side to the lower side that means the royal court and rulers were already become sinonized.

The music was not used to the way of admiring the heaven — it embraced the royal court with enthusiasm. As considering on the decorative transformation in the style of musical instruments, Han folks' musical instruments were shown to be carved out in that cave of Gongxian.